

美登利の変貌

——樋口一葉「たけくらべ」にみる娼妓像と廢娼運動——

笹尾佳代

1. はじめに

樋口一葉「たけくらべ」^①をめぐっては膨大な論考があるが、中でも多数の議論が重ねられたのは「西の市」を境に起きた美登利の変貌の解釈である。この日の美登利に何が起きたのか。初めて客をとつたとする「初店」説に佐多稲子が言及して以降、解釈論争が起きたことはあまりに有名である。「三人冗語」〔めさまし草〕一八九六・四)の「其の月其の日赤飯のふるまひもありしなるべし」(幸田露伴)という評価を淵源として「初潮」の訪れと読まれてきた解釈に疑問が呈され、「初潮」説、「初店」説、性病の検査を受けたとする「検査場」説など、変貌の原因は様々に論じられた。^②

しかし、美登利に何が起きたのかという視座からテキストの空白を埋めようとしたこれらの論考では、美登利変貌の表象そのものに

は、十分な注意が払われてこなかったと言わざるをえない。早くは前田愛が、吉原の祭りである「西の市」と美登利の「初潮」との重なりについて、「大鳥大明神にささげられたいけにえの証し」であり、「悪場所におくりこまれる美登利に負わされた性と金銭の穢れや罪障のしるし」と、その深意を捉えたが、^③その後の「たけくらべ」論争のインパクトは、何よりも美登利変貌の原因に解釈を向かわせた。その中で関礼子は「表象の変化の意味するものを軽視することは賢明ではない」とし、「初々しき大嶋田」(十四)という「記号」を「成女式」が行われたもの読み解いた。^④しかし、やはり美登利変貌の表象が、十分に検討されたとは言えない。

そこで本論では、変貌後の美登利の描写の中で、とりわけ「耻」の感情がくりかえされていることに留意したい。この日の美登利が、「憂く耻かしき事身にあれば人の褒めるは嘲りと聞なされて、嶋田

の鬢のなつかしさに振かへり見る人たちは我れを蔑む眼つきと察られて」(十五)と変化する様は、これほどまでに「世間の目は初潮を蔑み、嘲っていたであろうか」と、佐多が疑問を投げかけた理由でもあった。この「尋常ではない」変化を「初潮」などと済ませては、一葉の「憂き世」を覗いた視線は見出せない」と「初店」説が唱えられたが、^⑥そうであるならば、「尋常ではない」変化の表象そのものの意味こそが検討されるべきだろう。

後述するように、美登利の表象は、流通していた多様な娼妓イメージ^⑦が重ね合わされたものである。関良一は「文芸化された」吉原のイメージ^⑧が利用されていることを指摘し、「明治二十六、七年の、現実の吉原とその界限」から離れた「まぼろしの吉原」と「たけくらべ」を評したが、^⑨本論では、すでに流通しているイメージの重なりが美登利表象に顕著であることをまず確認し、変貌もまた、同質の表象指針によるものであることを明らかにしたい。その際に留意したいのは、開国以降におきていた廓や娼妓をめぐる意味づけの変容である。「たけくらべ」と同時代状況との関わりは、すでに多数指摘されてきたが、明治二〇年代に盛んに論じられた廃娼論や廢娼運動の動きと美登利の表象との関わりは、管見の限りでは捉えられていない。そこで、この頃の娼妓の意味づけやイメージの変容を踏まえながら、美登利の表象とその変貌が語るものを明らかにしたい。

2. インターテキストとしての娼妓物語

はじめに、変貌以前の美登利表象に近世以来の娼妓物語が織り込まれていることを確認しておこう。以下に見るように「たけくらべ」の典拠についてはすでに多数の指摘があるが、インターテキストとしての機能は十分に検討されてきたとはいえない。ここでは美登利の表象との関わりに留意しながら、その意味を捉えておきたい。「替熊」に鬢を結い「ぬり木履こゝらあたりにも多くは見かけぬ高き」(三)を覆った美登利の姿が娼妓のそれを倣っていることは明らかであるが、そのふるまいの描写には、物語上のイメージが重ね合わせられている。最も顕著なのは、千束神社の祭りの日の、次の喧嘩の場面である。

正太さんと喧嘩がしたくば正太さんとしたが宜い、逃げもせねば隠くもしもない、正太さんは居ぬでは無いか、此処は私が遊び処、お前がたに指でもさゝしはせぬ、ゑ、憎くらしい長吉め(中略)意趣があらば私をお撃ち、相手には私がる(五)

正太郎不在の中に入り込んできた長吉が、三五郎に乱暴を働く脇

で、美登利は「此処は私が遊び処、お前がたに指でもさ、しはせぬ」とたんかを切る。娼妓の切るたんかといえ、一助六由縁江戸桜（通称「助六」）の揚巻の、遊客意久へのものが有名であるが、多数の注釈が、この場面に揚巻とのイメージの重なりを認めている。^⑧意久は自らを受け入れない揚巻に立腹し、揚巻の情人の助六を罵るが、それを受けた揚巻は「叩かりようがぶたりようが、手にかけて殺さりようが、それが怖うて間夫狂いなるものかいなあ。慮外ながら三浦屋の揚巻でござんす。」と、殺されても助六への思いを貫くと矜持を示す。さらに終盤には、意久を切つて逃げる助六を揚巻がかくまう。^⑩

揚巻 待ちや〜。(中略) そりゃなんじゃ、棒振り上げて、わしをどうしやる。悪う棒三昧して、その棒の端の、わしが身へちつとでもさわると、五丁町は暗闇じゃぞ。

皆々 イヤア

揚巻 サア、わしが相手になろう。この揚巻を相手にしや。

美登利の「意趣があらば私をお撃ち、相手には私になる」という姿は、助六をかばって自らが相手になるという揚巻像に重なり合うだろう。それは、祭りの後に信如に憤慨する、次の悪態にも認められる。

よし級は上にせよ、学は出来るにせよ、龍華寺さまの若旦那にせよ、大黒屋の美登利紙一枚のお世話にも預からぬ物を、あのやうに乞食呼はりして貰ふ恩は無し、龍華寺は何ほど立派な檀家ありと知らねど、我が姉さま三年の馴染に銀行の川様、兜町の米様もあり、議員の短小さま根曳して奥さまにと仰せられしを、心意気に入らねば姉さま嫌ひてお受けはせざりしが、彼の方とても世には名高きお人と遣手衆の言はれし、嘘ならば聞いて見よ、大黒やに大巻の居ずは彼の楼は闇とかや(七)

「大黒屋の美登利」という名乗りや、大巻の不在を「闇」に例えることなど、美登利の表象には、近世物語に表された娼妓の「いきと張り」^⑪が重ねられている。そのことが語るのは、美登利が物語上の娼妓の姿をなぞり、そのイメージを内面化していることである。

美登利の名が禿に多い「みどり」「緑」に基づいていることは広く知られ、塩田良平は「明烏に出てくる禿みどりから連想したものであろうか」と指摘するが、女太夫に「好みの明烏さらりと唄はせ」(八)るといふ描写は、美登利自身もそれを知り、好んでいることを示すものといつてよい。廓内での稼ぎをあてにして町を素通りしようとする女太夫に、美登利は「一品」を与えて、「又ご蟲貞をの嬌音」さえ買うが、唄させた「明烏夢泡雪」(通称「明烏」)に

は娼妓浦里とともに、浦里付きの禿みどりが登場する（下の巻浦里雪責の段）。時次郎と隠れ逢っていたために雪の中で折檻される浦里の側で、禿みどりは浦里をかばって右往左往する。みどりは実は浦里の時次郎との間の子であり、姪と称して禿としていた。庭先に縛られた浦里とみどりを、塀をこえて時次郎が助けに来る。その後、三人とも塀の上に登り、覚悟を持って飛び降りるという展開である¹³。時次郎と浦里の凛々しさが印象づけられる見せ場であり、これを好む美登利の姿は、やはり物語の中の娼妓イメージにあこがれを抱いたものである。

美登利のみならず、子どもたちがイメージの吉原を享受していることは、例えば祭りの日の三五郎にも認められる。正太郎から美登利を迎えに行くよう命じられた三五郎の「おつと来たさの次郎左衛門」という返答は、『籠釣瓶花街酔醒』に因っている¹⁴。

関は「吉原的なもの」の諸イメージを、いわば「本歌取り」ふう大幅に召集し撰取している¹⁵とすが、「たけくらべ」執筆期の一葉が、それらを学ぼうとしていたらしいことは、日記等から窺うことができる。しばしば影響が指摘される井原西鶴を読んだのも、平田秃木から『西鶴全集』上下巻（博文館、一八九四・五・六）を借りたと思われる、一八九四（明治27）年の秋頃と推定され¹⁶、一葉家の蔵書の中に近世後期の洒落本が複数あること、その中でも吉原

を舞台とする『傾城買二筋道』『廓節要』の二作があることも注目される¹⁷。また、同年七月九日の「水の上日記」には、田中みの子の家で『艶道通鑑』を借りたとある。増穂残口による『艶道通鑑』（二七一五）は、「色情・好色を思想的な課題としてはつきりと形象化」したと評される書物である¹⁸。

先に確認した通り、先行する吉原のイメージが、とりわけ美登利に内面化された娼妓像を語るものであることは、あらためて留意されてよいだろう。姉大巻へのあこがれも、こうしたイメージを經由して表現されていることは重要である。早くは村松定孝が、美登利を、「張り」と「意地」と「俠気」を最大なモラルのように考えている旧時代の狭斜の女性の典型」と評したが、快活な美登利の表象に物語上の娼妓イメージが重ねられているためとあってよい。

「たけくらべ」の吉原には、春の花見、夏の燈籠、秋の俄という吉原三大景容が描かれ、江戸吉原との文化的な連続性は色濃い。「和歌や琴の音曲を含む」複合的な「遊び」の場としての姿は、美登利が遊芸手芸を学んでいることにも感じられる。しかし、言うまでもなく、「たけくらべ」の世界の吉原は、近代公娼制度によって再編された場であった。そこで次に、明治以降の吉原と娼妓をめぐる状況の変化を確認し、それらを語る言説の特質を捉えたい。美登利の表象についてさらに検討してみたい。

3. 吉原と娼妓イメージの変容

近代公娼制度の再編は、意味づけの操作とともにあったといつてよい。

まず重要なのは「貸座敷」の誕生である。その背景には、一八七二（明治5）年六月に、マカオで奴隷として買われた清国人の苦力が、横浜に停泊していたペルー国籍の汽船から脱走し、その解放を求めたマリアルス号事件の影響が指摘される。苦力の解放を求めた国際裁判において、ペルー側の弁護士からは、日本の奴隷契約として娼妓の約定が追求された。諸外国からのまなごしを意識した明治政府は、同年一〇月、「身売り奉公」を事実上の人身売買と認定し、隷属下におかれていた芸娼妓らの「解放」を命じる太政官達第二九五号「娼妓解放令」を発した。²¹しかし実態は娼妓の解放を実現させるものではなく、翌一八七三（明治6）年の一二月に定められた「貸座敷渡世規則」「娼妓規則」によって、娼妓は「自由意志」で営業を行っており、そのための場を貸すという欺瞞のもとに「貸座敷」が生み出され、近代公娼制度は整備されていく。²²以上のような展開の中で、ここで特に注目したいのは、娼妓の意味づけもまた、大きく変容していたことである。

周知の通り、近世の娼妓像として最も強調されたのは「孝」で

あった。例えばそれは、樋口家の蔵書にもあった、梅暮里谷峨による『傾城買二筋道』（一九七九年）の「序」の冒頭に、「孝行に売れ。不孝に受出され」という川柳が置かれていることから窺える。²³「孝行」のために売られた娼妓が、廓通いの「不孝」な男性に受け出されるという意であるが、娼妓のイメージがまずは「孝」であったことは明らかであろう。

もちろんそれは、問題を覆い隠すための意味づけに過ぎないといふべきものであり、そうした社会構造に娘達が組み込まれていたことの証左でもある。しかしこうした評価によって、売春に従事した女性たちが「消すことのできぬ烙印をおされるようなこともなく、したがって結婚もできるし、そしてまた実際に婚姻した」ことも明らかになっていく。²⁴江戸期に來日した外国人が、驚きを持って娼妓を見たことの記録が浮かびあがらせるように、「烙印を押されてしまふ事態の稀な生活空間が近世社会」にはあり、「娼妓奉公をしていた女性もまた婚姻関係を結んで家に入っていくという経路が確保」されていた。²⁵

また、この頃の一葉が読んだ『艶道通鑑』は、遊里の枠の中で考えられる事の多かった男女の「和の道」を、その枠を離れて「男女夫婦の世界の事として論じた所」に特徴があるとされ、「夫婦の誠」を示す「恋愛の情」を礼賛するものであるが、ここでは、娼婦と客

の関係も「夫婦・関係」から除外されていない。²⁷⁾つまり女性たちは分断されていないのである。

こうした状況をふまえる時、「今日此頃の全盛に父母への孝養うらやましく」(八)という美登利の思いも、先の引用部の「議員の短小さま根曳して奥さまにと仰せられし」という姉を誇るエピソードも、近世から継続されたイメージであると、ひとまずいってよい。²⁸⁾「華魁衆として此処にての敬ひ」とも語られるが、例えば、勝川春好の浮世絵《江戸三幅対》に描かれた江戸の三大スターが、力士谷風、市川団十郎、そして扇屋花扇であったことがよく知られているように、吉原の華魁はとりわけ特別な存在であった。

ところで、「たけくらべ」の「未定稿」である「雛鳥」には姉の全盛を誇る美登利の語りの中に「議員」の「奥さまに」というものはない。²⁹⁾定稿に描かれたこのエピソードは、明治二〇年代後半のこの頃には事情が異なりはじめていたという意味において、近世以来の娼妓イメージを美登利が持つことを印象づけるものとなっている。廓をめぐる同時代の動きを捉えた小仲信孝は、龍泉寺町の「ソト」からは美登利は「異端の烙印」を押され、「断罪の声」を受ける存在であると指摘し、その要因として娼娼運動での娼妓の評価を挙げている。³⁰⁾

開国後、娼妓の意味づけが変容したことは、すでに多数の論考に

よって明らかにされてきた。それは、端的に言えば、娼妓の価値を貶めていくことであった。福沢諭吉は推進者のひとりとして有名だが、その論調は、例えば「家の為に肉体を売て以て其孝となす」ことは「世の弊風」であり、「仮ひ孝道の為にするも甚だ賤しむ可きものなりとの感覚を起」こす必要があるといったものであった。³¹⁾

しかし福沢は、「千百の事情のために之(娼妓…引用者注)を禁ずること能はざる」という存娼論の立場であり、その上で「深く之を隠すの注意ならざる可らず」と「人の目」が届かないよう主張する。³²⁾関口すみ子が指摘するように、福沢の一連の発言は「芸娼妓を見る人々の視線(憐憫と賞賛)を、西洋で prostitution をみる視線(蔑視と排除)に置き換えようとした」ものであった。³³⁾

そうした中で、キリスト教徒らを中心に娼妓の動きが生じる。群馬ではじまったそれは全国へと広がり、一八九〇(明治23)年、島田三郎、植木枝盛、巖本善治らを中心に全国娼妓同盟が結成された。藤目ゆきによると、娼娼論の批判の要は、「売春関係者を国家が許容しているということ」であり、「売春関係者の公許を廃し犯罪者化すること」によって「国家の体面をつくらう」とともに、「売春を罪悪とし娼妓を賤視する社会倫理を普及すること」であったという。³⁴⁾その中であって、植木枝盛「娼妓の急務」(『女学雑誌』一八八九・一二・一四、付録)は、「娼廓に這入つたものでも、良民の

妻君となることもある」という事例を批判的に示し、「売淫を賤しむものが薄い」と警鐘を鳴らした。すなわち、「賤し」みを強くし、娼妓を妻としてはいけないということとなる。

また牟田和恵は、明治二〇年代に「愛情を基礎とする男女関係と一夫一婦の理念」に基づいた西洋的な「家庭（ホーム）」が称揚され、娼妓はその破壊者であるとして「売淫を罪悪視」する廢娼論が盛んに論じられたことに注目する。それは民間における廢娼運動へとつながるが、その嚆矢となったのは、一八八六（明治19）年一月に、矢島樺子らによって生み出された東京基督教婦人矯風会（九三年より日本基督教婦人矯風会、以下矯風会と略記）であった。矯風会は「一夫一婦制の建白」（一八八九年）から廢娼運動へ向かったが、「正義感と人道主義にあふれる」この運動が、一面では「売買春を罪悪視しそれを行う女性にステイグマを負わせる」こととなり、娼妓の存在を「物理的にも観念的にも厳しく隔離すること」に通じたという問題は留意されてよい。

こうした問題への文学場における反応としては、一八九五（明治28）年三月の『文芸倶楽部』に掲載された北田薄氷「浅ましの姿」をめぐる事例を挙げることができる。いわゆる吉原訪問記であり、嫖客に「娼を売りて我が客にせむ」とする娼妓の姿について、「孝女の親を思ふ一心」からかと想像しながらも「浅ましの姿」と観じ

たものであったが、その翌月の同誌には、「あんまり反身におなりでないよ」とたんかを切る娼妓を語り手とした批判文（なか誰袖「浅ましの姿」を讀みて）^①が掲載された。この出来事は泉鏡花によつて長く記憶に留められ、「薄紅梅」（一九三七年）に描き出されている。主人公糸七の「一人で純潔がつて廓の売色を、汚れた、類れた、浅ましい、とその上に、余計な事を、あはれがつて、慈善家がつて」という痛烈な批判は、西洋的まなざしを通して、傍観者として娼妓を語ることへの警鐘であつただろう。^②

廢娼運動の熱心な論客であつた島田三郎、巖本善治が、一葉の交友関係に近い人物でもあつたためか、一葉自身が廢娼や娼妓をめぐる言説に触れていたことは「殘簡 その二」に認められる。

かれも人も場所にて大路に豪奢をきそふ人あり これも人も
夕ぐれの門にゆき、を招きて情をうるの身あり かれを貴也と
いふしるべからず これを賤しといふしるべからず（中略）
娼妓に誠あり 貴公子にしてこれをたばからむハ罪ならずや
良家の夫人にしてつまを偽る人少なからぬにこれをばうき世の
ならひとゆるして一人娼婦斗せめをうくるハ何ゆゑのあやまり
ならん あはれこれをも甘んじてうくればうき世に賤しきも
の、そしりをうくるもむべなるかな

池水によなく月も宿りけり／＼かはる枕よなにか罪なる

時、この後の描写も含めて、「耻」と「蔑み」を感じる様子がかくり返されていることは重要である。⁴¹⁾

この「残簡」は、一八九四（明治27）年晩秋から翌年の二月頃に書かれたと推定されており、その後「たけくらべ」の連載をはじめ、「にこりえ」（『文芸倶楽部』一八九五・九）を発表したことになる。執筆の背後に、「娼婦」ばかりが「賤しきもの」と責めを負い、断罪されることに憤る思いがあったことは明らかである。⁴²⁾

4. 美登利の変貌とその悲劇

ではここで再び、「たけくらべ」の美登利の変貌後の表象を確認してみよう。

美登利打ちしほれて口重く、姉さんの部屋で今朝結つて貰つたの、私は厭やでしようが無い、とさし俯向きて往來を耻ぢぬ。

（十四）

憂く耻かしき事身にあれば人の褒めるは嘲りと聞なされて、嶋田の髻のなつかしさに振かへり見る人たちをば我れを蔑む眼つきと察られて（十五）

先に確認した、娼妓をめぐる同時代状況との関わりの中で捉える

内藤千珠子は「公娼」を語る磁場」にあつて、「恥」が「娼妓」によつて引き受けられるべきものとして意味づけられている」ことを重視している。⁴³⁾ 矯風会による娼妓運動で目指されたのもまた、「耻を知らしめ正に導かん」と、娼妓に「卑賤観」を内面化させることであつた。それはまさに、ここに描き出された美登利の姿であるといつてよいだろう。つまり、美登利に生じた「耻」や「卑賤観」は、娼妓運動のなかで新たにありべきとされた娼妓像が重ねられた表象と捉えられるのである。

「たけくらべ」論争以降、この日の美登利に何が起きたのかが問われたことで、明らかにされたことも多い。例えば近世の廓の慣習を詳細に調査した小林勇は、島田髻に結び、振り袖を着た極彩色の美登利の姿から、禿の「突出し」や「新造出し」に近い指摘する。それは、初潮を迎えた禿の披露目の儀式であり、娼妓となる「環境が整つたという事実」の表現とする。⁴⁴⁾ 小林の指摘に則るならば初潮が訪れたことになるが、いずれにせよ論争以降の「初潮」説は、美登利が「現実が目覚めたとする点に重心が移動している」と整理されるように、娼妓の実態を知つたと推定されている。しかし、近世の娼妓イメージを享受していた美登利が、性をひさぐという実態を

知ったことは、「耻」と「蔑み」を感じる表象そのものに刻印されているといつてよいだろう。

さらに捉えておく必要があるのは、娼妓の実態を美登利が「耻」と感受した背景である。岡野幸江は「たけくらべ」を「矜持」の虚構がこわれていく物語⁴⁶とし、矢部彰は、美登利の「真の悲劇」が「娼妓」は「賤しき勤め」であることを「認識してしまったこと」⁴⁶とする。しかしこれらの論考もまた、その要因を、自らが娼妓になることとその実態を知ったことに還元する。だが、「娼妓」の「賤しさ」や「蔑み」は、同時代において生み出され、広められた評価であることに改めて留意するとき、なぜ美登利が「耻」や「蔑み」を感受する少女として表象されたのか、表現の相補性に目を向けるべきであろう。⁴⁷高田知波が指摘するように、美登利の変貌を「人は怪しがり」、「吉原の裏事情にも精通した大人たち」でさえ、その事情を推察できていない。

ここで留意すべきは、学校教育である。高田は、「父母への孝養うらやましく」という姉への思いが示される直前に「修身」が話題になることを受けて、その思いを募らせたのが、父母への「孝」を尊び天皇への「忠」と結ぶ「修身の授業」であるとした。そして「孝」を実現している姉は、「学校で教えられる倫理軸」に即しても「優越的モデル」と捉えられるものであった。⁴⁸

しかし一方で、女子に求められる「修身」の基本は「貞淑ノ美德ヲ養」うことであつたこともよく知られている。「貞淑」もまた、明治初期には「貞女は二夫に見えず」といった儒教的貞淑観であり、婚姻前の貞操は話題となっていなかったのに対して、明治二〇年代後半には、「処女」の「神聖」は命より重く、身に「汚辱」を受けるとは「父母を辱むる」こととする、プロテスタンティズムに基づいた「処女」の「貞操」観への変質が見られる。つまり、学校を好み、新しい貞操観とそれを守ることの戒めを知る環境にいた美登利だからこそ、「耻」の感情が動いたといつてよい。

そうした時、「たけくらべ」において学校が大きく印象づけられていることも、あらためて興味深いものとなる。美登利らの通った「育英舎」の生徒の数は千人を超える「現実離れた大きさ」であり、「学校」の重要さを物語⁴⁹るものと指摘される。ここではそれが、新しい貞操教育を受ける層の増加を意味していると捉えてみたい。作中からは、子どもたちの間に新しい娼妓イメージが浸透していることもまた、窺うことができる。顕著なものには、美登利の変化について聞いた正太郎が唄う「流行ぶし」であろう。「十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ」「今では勤めが身にしてみても」(十四)という歌は「それが曲輪に身を売られ、月に三度の御規則で、検査なされるその時は、八千八声のほととぎす、血を吐くよりもまだ辛い」

と続く。^⑤

この歌が、「娼妓の自由意志」とともに近代公娼制度の両輪のひとつであった「強制的性病検診制度」をうたっていることは留意されてよい。それは、「女性に対する暴力」が「文明開化のエピソードのなかにまぎれこまされてしまった」制度であった。さらに、「人身売買否定の名目」にたつて、娼妓の自由意志による「賤業」を政府が認めることは、「救済のため」であり、「貧窮層を憐れんでのことであるとの偽善で粉飾」されていたことを踏まえるとき、祭りの日の長吉の「姉のあとつぎの乞食め」という罵倒は、同文脈上からのものと考えることができる。^⑥そして、「耻」と「蔑み」を内面化した美登利が、子どもたちの前にも姿をあらわさないことは、「卑賤観」を知るまなざしをおそれてのゆえであらう。

「雛鳥」を描いた頃の一葉は、「孝行がしたい」と、近世の「孝」の物語をたどって「店」に出ると語る美登利の姿を描いていた。^⑦対して、定稿で選ばれたのは、娼妓像の変容が投影された美登利の姿であったことがわかる。吉原の物語を描くにあたって、娼妓ではなく、子どもたちに焦点化したのには、制度や意味づけの変容がもたらす事態こそを捉えようという意図のようにも思われてくる。そして、その娼妓の新しい制度に照らす時、美登利には閉じこもったままの三年が流れることとなる。^⑧近代公娼制度の整備と、そこで起き

た廃娼運動でさえも、娼妓を「耻」と「蔑み」によって追い込み、封じ込めるものであったこと、そして勤めを凌ぐためのよすがであったであろう「孝」の物語すら奪うものであったことの救われなさを、美登利の変貌表象は語っているのである。「たけくらべ」は、近代公娼制度の欺瞞と、廃娼運動さえもが取り残していた問題を鮮明に照射している。

注

- ① 『文学界』（一八九五・一、二、三、八、一一、一二、一八九六・一）に連載のち、『文芸倶楽部』（二八九六・四）に一括掲載。本文の引用は、『樋口一葉全集 第一巻』（筑摩書房、一九九四・一一）に拠った。
- ② 佐多稲子『たけくらべ』解釈へのひとつの疑問『群像』一九八五・五。
- ③ 近藤典彦『たけくらべ』検査場説の検証』（『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇五・九）は、「初店」後にも赤飯が配られる風習があったことから、露伴が初潮と解釈したと確証されないとする。論争の内実は、小谷野敦『たけくらべ』論争』（『現代文学論争』筑摩書房、二〇一〇・五）に詳しい。
- ④ 前田愛『子どもたちの時間——『たけくらべ』試論』『樋口一葉の世界』前田愛著作集第三巻、一九八九・九、二九〇頁。初出は『展望』二九七五・六で、論争以前の論考である。
- ⑤ 関礼子『悪場所の少女 美登利私考——『たけくらべ』語る女たちの時代 一葉と明治女性表現』新曜社、一九九七・四、二八五―六頁。
- ⑥ 佐多稲子（前掲②）。

⑦ 本論では公娼制度内にいた娼婦を語る言説を対象とするため、その範囲にあった娼婦のことは、個別事例に従う場合を除いて、「娼妓」と呼称する。

⑧ 関良一「たけくらべの世界」『樋口一葉 考証と試論』有精堂、一九七〇・一〇、二六三頁。

⑨ 和田芳恵・関良一「泥草履（樋口一葉）——『たけくらべ』六」（『国文学 解釈と鑑賞』一九五七・二二）で、関は「芝居がかりで、自分の座敷を城廓として、闖入者を罵つたり、自分の部屋に身を寄せている者をかばつたりする遊女の啖呵のまね」とし、和田は「美登利の役柄」を「助六」の揚巻」と連想する。一葉が龍泉寺前で過ごした一八九三（明治26）年の俄狂言に「助六」がかかったことは「奴司の助六小徳に替る」（『東京朝日新聞』一八九三・九・二三、朝刊）から知ることができ、「塵中日記」には、母たきが「勢揃い」を見に行つたこと（同年九・一五）や、俄の歌詞の（同年一一・一四）の記述がある。

⑩ 『助六由縁江戸桜』（諏訪春雄編、白水社、一九八五・四、底本は「助六」『歌舞伎十八番 市川団十郎お家狂言 下』久保田彦作編、紅英堂、一八八三・一）。

⑪ 諏訪春雄「解説」（前掲⑩）、一五六頁。

⑫ 関良一「たけくらべ」人名考（『樋口一葉 考証と試論』有精堂、一九七〇・一〇）に詳しい。「禿」の「みどり」がやがて「松の位」の「大夫」となって栄えるという縁起に因んでいる。塩田良平『評解 たけくらべ・にこりえ』山田書院、一九五八・五、八二頁。

⑬ 戸坂康二「解説 明烏夢淡雪」（『名作歌舞伎全集第16巻 江戸世話狂言集』二 東京創元新社、一九七〇・七）参照。「新内 明烏夢淡雪」は、モデルとなった心中事件をもとに、初代鶴賀若狭掾によって一七七二年に作られたとされる。

美登利の変貌

⑭ 『籠釣瓶花街酔醒』（菊池明編、白水社、一九八六・五）の「解説」によると、全盛の花魁八ッ橋を身請けしようとした次郎左衛門が、突然愛想づかしを受け、憤って八ッ橋らを斬殺する、いわゆる「吉原百人斬」を題材とした物語である。作中の「十人ぎりの側杖」（二）とは、この物語が連想されたものと解説される（菅聡子校注「たけくらべ」『樋口一葉集』新日本古典文学大系 明治編24、岩波書店、二〇〇一・一〇）。

⑮ 関良一（前掲⑧）、二六三頁。「西の市」の日、正太に「帰つてお呉れ」と言う美登利の姿にも、八ッ橋の「愛想づかし」との関連を認めている。

⑯ 平田禿木からの手紙（一八九四年・一〇・一九）に「御約束の鶴全集 近きに持参いたすべく」とある（野口碩編集『樋口一葉書簡集』、筑摩書房、一九九八・一〇、一四一頁）。和田芳恵「新装版 一葉の日記」（『講談社、二〇〇五・一〇、二六九頁）は「たけくらべ」を書く前に、西鶴を味読した」とし、それを重視する。

⑰ 岡保生「一葉と洒落本」（『学苑』一九八七・一一）。岡は、吉原の手引き書的女性質を持つ『廓節要』は、禿としての美登利の造型に特に結びついたとし、「塵中日記」（一八九三・九・二四）に『古今著聞集』の巻第八「好色第十一」からの抜き書きがあることから、龍泉寺町移住後の一葉が「好色」的なものに関心を示している」と指摘する。

⑱ 川村湊「色情のエチカ」『セクシャリテイの近代』講談社、一九九六・九、三三六頁。

⑲ 村松定孝「たけくらべ」のリアリズム（『近代日本文学の系譜 上』寿星社、一九五五・一〇、一〇八頁）。

⑳ 田中優子「遊廓と日本人」講談社、二〇二一・一〇、四二頁。「教養ある強い女性」といった近世の遊女像については、本書および、同一異文化を伝える、ということ（『国際日本学』二〇〇七・三）等を参照。

- ⑲ 藤目ゆき『性の歴史学——公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優勢保護法体制へ』（不二出版、一九九七・三）参照。開国後間もなくから、遊廓が日本の近代化政策の暗礁となることを政府が認識していたこと（早川紀代『近代天皇制国家とジェンダー』青木書房、一九九八）、司法省の「奉公人年定期御布告案」があったこと（大日方純夫『日本近代国家の成立と警察』校倉書房、一九九二）等の要因も明らかにされている。
- ⑳ 娼妓解放令がもたらした事態と、公娼制度の再編については、人見佐知子『近代公娼制度の社会的的研究』日本経済評論社、二〇一五・二に詳しい。
- ㉑ 『洒落本大成 第十七巻』中央公論社、一九八二・九、一一一頁。
- ㉒ 牧英正『人身売買』岩波書店、一九七一・一〇、一四六一—四九頁。
- ㉓ 巖本新奈『からゆきさん 海外〈出稼ぎ〉女性の時代』共栄書房、二〇一五・五、三六頁。
- ㉔ 中野三敏『増穂残口の人と思想』『近世色道論』日本思想体系60、岩波書店、一九七六・八、四一〇頁。
- ㉕ 川村湊（前掲⑱）、三五頁。
- ㉖ 一葉の友人であった田辺夏子（『一葉の憶ひ出』近代作家研究叢書42 日本図書センター、一九八四・九、八頁）は、『大音寺前に住んでゐた時』あの辺りでは玉のやうな性質の女の子が吉原で全盛になるのが、一番の親孝行だと思ふてゐるのよ』と感慨深かさうに、言ふてゐました』と回想している。
- ㉗ 同部分は、京橋の弁護士から指輪を貰う、「緋ぢりの長襦袢」を「大呉服の誰」にたのめた、などとされている（『たけくらべ（未定稿B）』「その六」『樋口一葉全集 第一巻』筑摩書房、一九九四・一一、四六〇頁）。浅野洋『たけくらべ』の擬態——裏声で歌われた戦争小説』（『渾
- 池 近畿大学大学院文学研究科紀要二〇一三・三）は、定稿の常連客の姿に、日清戦争成金の影を見ている。
- ㉘ 小仲信孝『特集 正統と異端 美登利のゆくえ——『たけくらべ』のウチとソト』『跡見学園女子大学人文学フォーラム』二〇〇八・三。
- ㉙ 福沢諭吉『婦女孝行余論』『時事新報』一八八三・一〇・一八。
- ㉚ 福沢諭吉『品行論 第七』『時事新報』一八八五・一一・二七。
- ㉛ 関口すみ子『御一新とジェンダー 荻生徂徠から教育勅語まで』東京大学出版会、二〇〇五・三、二七六頁。
- ㉜ 藤目ゆき（前掲㉑）、一〇三頁。
- ㉝ 牟田和恵『戦略としての家族 近代日本の国民国家形成と女性』新曜社、一九九六・七、一三二頁。
- ㉞ 泉鏡花『薄紅梅』の位相については、田中勲儀『薄紅梅』の成立過程』（『泉鏡花 文学成立』双文社出版、一九九七・一一）、同『樋口一葉と同時代作家——北田薄水・泉鏡花を中心に』（『論集樋口一葉Ⅳ』おうふう、二〇〇六・一一）に詳しい。
- ㉟ 島田三郎は、萩の舎の同門であった島田政子の夫であり、政子が書生との仲を疑われ、一方的に離縁されたことを一葉が憤ったという穴澤清次郎の回想「一葉さん」（『二葉全集』月報第二号、筑摩書房、一九五三・五）等がある。また、一葉が寄稿し、同人とも交流のあった『文学界』は、巖本善治の主宰した『女学雑誌』から派生したものである。
- ㊱ 『補注』『樋口一葉全集 三卷（上） 日記Ⅰ』筑摩書房、一九九四・七、七五四頁。
- ㊲ 和田芳恵（前掲⑯）は、一葉が吉原を「社会悪とも病弊とも考えた」（二五九頁）とし、その考えによって、龍泉町からの転居を余儀なくされたとする。また、横山源之助との手紙のやりとりから、下層社会を見据えた社会運動に進もうとしていたとも推定している（二六九頁）。

- ④0 戸松泉は美登利変貌の描写の『文学界』版と『文芸倶楽部』版との間の改稿を検討し、『文芸倶楽部』が「強いられた運命を、痛ましいほどに甘受している」と指摘している（講演「たけくらべ」自筆草稿を開く…樋口一葉〈書くこと〉の領域」『国際日本文学研究集会議録』二〇一三・三）。「たけくらべ」の複数の本文の異同については、同「複数のテクストへ 樋口一葉と草稿研究」（翰林書房、二〇一〇・三）に詳しい。
- ④1 内藤千珠子「帝国と暗殺 ジェンダーからみる近代日本のメディア編成」新曜社、二〇〇五・一〇、八二頁。同『アイドルの国』の性暴力』（新曜社、二〇二二・八）にも問題意識が継統されている。
- ④2 「女子慈愛館設立趣意書」『婦人矯風雑誌』一八九四・六・二。
- ④3 小林勇「美登利と信如——『たけくらべ』私見」『国語国文』二〇一八・一二。
- ④4 山本欣二「売られる娘の物語」『樋口一葉豊穰なる世界へ』和泉書院、二〇〇九・一〇、五九頁。山本は「歴史的文脈」をふまえて「どのような立場の変化があり得たか」について考察し、美登利の両親と楼主との間の「身売り」契約説を提示している。
- ④5 岡野幸江「醜業婦」という必要悪——開花期思想家たちの主張「買売春と日本文学」東京堂出版、二〇二二・二、一一〇頁。岡野は「にりえ」を、矜持さえ持てないお力が「自尊心を回復せん」とする物語とするが、本論は美登利の「矜持」を崩壊させたものを同時代の公娼制度と娼妓をめぐる言説と捉えるものである。
- ④6 矢部彰「子どもたちの「成長」——『たけくらべ』論」『樋口一葉私論』近代文芸社、一九九五・九、六六頁。
- ④7 「三人冗語」の森鷗外の発言に（少女）は不可侵的存在として保護し、（娼婦）は社会から抹殺されて当然とする「醜業婦」観を捉えた高田知波「少女と娼婦——一葉「たけくらべ」」（『名作』の壁を越えて）『舞

- 姫」から「人間失格」まで」翰林書房、二〇〇四・一〇、五一頁）は「醜業婦観」そのものを問い直すことが、「たけくらべ」研究の「新たな視座」となると提起しており、示唆を得た。
- ④8 高田知波「たけくらべ」における制度と（他者）」『樋口一葉論への射程』双文社出版、一九九七・一一、七三頁。学校制度に着目した論考には、小森陽一「口惜しさと恥しさ」（『文体としての物語』筑摩書房、一九八八・四）等がある。
- ④9 プロテスタンティズムの女性道徳の影響については、佐伯順子「遊廓」（前掲④5同書所収）参照。引用は、その影響が見られる貞操観が著された女訓書である三輪田真佐子『女子の本分』（国光社、一八九四・一一、一九頁）。
- ⑤0 高田知波（前掲④8）、六四頁。
- ⑤1 藤沢衛彦『明治流行歌史』春陽堂、一九二九・一、四四七頁。「厄介節」として、二種の採録がある。
- ⑤2 藤目ゆき（前掲⑤1）、九一―九二頁。
- ⑤3 飯沼久美子「樋口一葉『たけくらべ』論——「穢れ」をめぐる力学」（『愛知淑徳大学国語国文』二〇二二・三）は、長吉の中では「乞食」「女郎」であり、その共通項は「存在自体の「穢れ」であると指摘する。「たけくらべ（未定稿B）」「その六」（前掲⑤2）、四六〇頁。
- ⑤5 「貸座敷引手茶屋娼妓取締規則」（明治二十五年五月二十三日付（六月一日施行））には「十六歳未満ノ者ハ娼妓タルコトヲ得ズ」とある（『官報』一八八七・五・二三）。